編集後記

『摂南大学教育学研究』第 14 号ができあがりましたので、お届けいたします。

今号に掲載した研究論文は 4 本です。林論文は、「総合的な学習の時間」が創設されて 20 年の間に、政策、教育界・学会の議論、社会状況の変化にともない当初のねらいが揺らぐなかで、今後に向けてまた新たな役割を担わされることについての議論を展開しています。森論文は、現在の校長が置かれた状況を検討し、専門学会が作成した「校長の専門職基準」の試案を参照しながら各都道府県が主体的に基準を設定することを提案しています。吉田論文は、本学「Smart and Human 研究助成金」による共同研究の成果の一端で、大学生を対象とする「職業選択素地」とでもいうべきものについての調査結果を分析しています。朝日論文は、「学校安全」に関する議論を整理し、学校安全を脅かす事象を異分野の研究の知見を援用して捉え直すことを試みています。それぞれ領域は異なりますが、いずれも興味深い論考になっています。

前号（13 号）ではここに、「教職課程コアカリキュラム」の一刻も早い公表を願うばかりだと記しました。それから間もなく、ようやく「教職課程コアカリキュラム」が公表され、教職課程科目の骨格が明確になりました。予想以上に細かな内容でした。

大学で教える者はアカデミシャンであることが基本に求められます。研究誌のページをめくれば、いずれも専門的な、その学問分野に新しい知見をもたらそうとする意欲作が並んでいます。これこそ研究者、大学人の仕事だと、その度に初心に帰ります。学問分野の特定領域をとことん追究して、ほんの一隅に発見されたアイディア、熟成に熟成を重ねたアイディアから、ようやく結晶化された研究成果が生み出されます。そういうわけで、研究者、大学人であれば専門分野において幅広い視野と専門的知識をもっていますが、研究成果として表されるのは特定の領域の本当に狭い一部分だけになります。

「教職課程コアカリキュラム」の細かな内容は、教職課程各科目の全体目標を覆い、細分化された到達目標にまで及んでいます。それに頭を悩ませた先生も大学全体ではあったことと思います。教職課程全体としては、学部・学科の設置目的と免許状の相当関係が問い直されることとなり、厳しい判断を迫られる部分もありました。また、こうした状況は全国いずれの大学においても似たり寄ったりだろうと推察します。

本号も発行までに多難を要しました。再課程認定の準備に忙殺されるなか、このような形で発行できるのは、ある面では教務課の事務の方々のお陰でもあります。この場を借りてお礼を申し上げます。

さて、再課程認定に向け大学が動いています。日常の現実は、研究とは異なる厳しさを投げかけてきます。ともに精励し、成果を現しながら、今後も『摂南大学教育学研究』を充実、発展させてまいりたいと思います。ひきつづき皆様のご理解・ご助力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

編集委員・幹事　　朝日　素明